

今回は、11月16～19日に行われましたAHSについて、日本大学松戸歯学部の小出恭代先生に報告させていただきます。

## 2017 Scottsdale Headache Symposium 参加およびUCLA 見学レポート

日本大学松戸歯学部 有床義歯補綴学講座 小出恭代

### AHS 参加

2017年11月16～19日の日程で American Headache Society 2017 Scottsdale Headache Symposium が、アリゾナ州の Scottsdale にある JW Marriott Desert Ridge Resort and Spa のボールルームにて開催された。4日間で計71人の講演が行われ、頭痛のメカニズム、診査、診断、治療といった日本においては主に医師向けの内容から、口腔顔面痛領域に至るまで、かなり幅広い内容が扱われた。

大会前日には Before the event として Advanced Pre-meeting Course が行われ、初日の16日は、14時から4つの Pre-meeting Course が設定された。その中には Pre-meeting Course: TMD と称するものがあったが、その内容は口腔顔面痛に関する話題が大部分を占めた。三叉神経痛や神経障害性疼痛のほか、Burning Mouth Syndrome

(BMS) については概要から始まって、有病率、病態、マネージメントに至るまで詳しく論じられた。中でも印象的だったのは、局所的な治療においてはクロナゼパムを使用するよりも Low Level Laser Therapy (LLLT) の



タンブラーやモバイルチャージャーなど  
豪華なノベルティグッズが配布された

ほうが高い効果が期待できること、新たな方針としてボトックス治療も成果が出始めていることだった。

Pre-meeting Course を終え、2日目からは主に一次性頭痛に関する講演が行われた。

米国においては、州により歯科医も頭痛の診断、治療を行えることから歯科医の参加も多かった。治療に関しては、まだ日本ではてんかん治療に限って使用が認可されているオクスカルバゼピンが、当然のように第一、第二選択薬として処方されていたことに驚きを覚えた。また、日本の頭痛学会総会や Headache Master School Japan (HMSJ) でも話題となった Neuromodulation についても取り上げられた。従来のように薬に頼らず器具を用いて外部から刺激を与えるこの治療法は、侵襲性が少ないことから注目度が高く、各地で臨床研究が進んでいる。企業ブースにもいくつか出展され、実際に試用できるものがあった。

上) スライドを用いた講義がある一方で……

下) イブニングセミナーではワインを飲みながらの受講も可能。日本では考えられない光景だった



大会3日目は無料で受講できるセミナーと、‘The Best and Most Interesting Research from the Last Year’ に参加した。

セミナーは内容の異なる複数の講義が用意されていた。これらは事前登録制ではあったが当日の受付はなく、どのセミナーにも自由に参加できた。中でも参加者の人気を集めていたのは、頭痛を対象としたボトックス療法をメインとしたインジェクショントレーニングセミナー。講義後には、あらかじめ用意された柔らかいマネキンを使った実習も行われた。マネキンに刺入点を記して刺入方向等の確認をするのだが、時折ディスカッションが交わされるなど終始リラックスした雰囲気で行われた。

ほかに印象的だったのは、行動および心理マネージメントについて紹介するセミナー。講義者自身がまるでスポーツジムの

インストラクターかのような服装で登壇し、頭にはワイヤレスマイクを装着。時折、呼吸法やストレッチなどの実技に参加者を巻き込むようにしながら講演を行っていた。その間、一帯はまるでスポーツジムのような雰囲気となった。

‘The Best and Most Interesting Research from the Last Year’ では2017年に ‘Cephalalgia’ と ‘Headache’ に掲載されたものの中から、いくつかの論文の紹介があった。その中では日本の櫻井圭太先生（東京都健康長寿医療センター）らによって発表された ‘DINOSAUR TAIL SIGN: A Useful Spinal MRI Finding Indicative of Cerebrospinal Fluid Leakage’ も採り上げられた。これは、腰部脂肪抑制 T2 強調像において Dinosaur tail sign が脳脊髄液漏出の診断所見として有用であることを示唆した内容である。このような世界で注目度の高い論文をあらかじめピックアップし、キャリアや専門を問わずに参加者全員で共有するという考え方に強く共感した。



インジェクションセミナーはマネキンを用いて行われた。



また、当会では徹底したデジタル化が目についた。まずは資料提供についてだが、従来の国内開催の学会のように大量の紙資料が提供されることはなかった。出発前に専用アプリをダウンロードしておくことで、学会スケジュールやプレゼンテーションスライドを予め把握することができ、非常に便利であった。

これによって予習が可能となるうえに、学会中の連絡事項や講演者のプロフィール（写真付き）の確認が容易。参加者全員に配布されるバーコード付きのネームタグを使えば、企業との情報交換も「ピッ!」と一瞬。このように、会全体において効率化が図られており、会期中はストレスなく情報収集に集中することができた。

資料やスケジュールは専用アプリでいつでも確認OK!

## Prof. Andrew Charles を訪問

学会後には、昨年の日本頭痛学会総会でも講演を行った Andrew Charles 先生を訪問。彼自身、診療の場面においては UCLA の Orofacial Pain との連携は薄いようだが、忙しい診療の合間に病院や研究室を親切丁寧に案内していただいた。

約束の時間にクリニック前に到着。日本では入口がガラス張りで開放感のあるクリニックに慣れているため、マンションの一室のような外観を目の当たりにして入室を躊躇したが、長身の Charles 先生が優しい笑顔で迎えてくれた。入口横のプレートには、寄付者である Goldberg 氏と医局員の名が記されていた。診療スペースはすべて個室化されており、いずれもゆったりとして清潔感に溢れていた。この日は Charles 先生のほかに 3 名の先生方が診療しており、そのうち 2 名の先生はかつて Orofacial Pain の Merrill 先生の講義を受講したそうだ。Charles 先生によると、来院者は口腔顔面痛領域の痛みを主訴とする方が非常に多いとのこと。入院病棟や研究室はとても広く、窓からの景色も極めて開放的。研究機器も多様で、片頭痛病態において重要な役割を果たしている Calcitonin Gene-Related Peptide (CGRP) や Cortical Spreading Depression (CSD) の研究に関する機器も並んでいた。1 階にはスーパーコンピューターが大きな存在感を示していた。Charles 先生は卒業後 35 年 UCLA に勤務し、著名人も多数診察している。プライバシーのため名前は公表できないそうだが.....



病院前の案内板



RONALD REAGAN UCLA MEDICAL CENTER 前にて  
Charles 先生（写真左）と撮影



入口のネームプレートには寄付者と医局のメンバーが記されている

今回の AHS と UCLA の見学を通して、やはり医療制度の相違や歯科医師の業務制限を痛感した。特に、カリフォルニア州やアリゾナ州では Orofacial Pain 専門医は検査も治療もボトックス治療までも医師と同様に行えることに驚いた。

Charles 先生と撮影。また、短時間ながらも桑島梓先生（日本大学松戸歯学部）が留学中の UCLA の Orofacial Pain Clinic も見学することができた。そこで学んでいる先生方は年齢層も国籍も多様性に富んでいた。専門性に対する評価が非常に高く、OFP 専門のクリニックを数件経営する先生の存在や情報共有サイトの開設等、当たり前のようにビジネスチャンスに直結しているように感じた。数日間ではあったが、刺激を受ける場面も多く

あり、さらなる研鑽への意欲が高まった。

次回（第 60 回大会）の AHS は 2018 年 6 月 28 日～7 月 1 日にサンフランシスコで開催される予定である。

若い先生方も是非参加してみてください。きっと刺激を受けますよ！

---

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: [jsop-service@onebridge.co.jp](mailto:jsop-service@onebridge.co.jp)